



探究学習の全校推進体制

研修や生徒の授業評価の共有を通じて、 探究学習の意義が教師間に浸透

東京都・私立神田女学園中学校高校

1分
で
分かる軌跡

東京都・私立神田女学園中学校高校は2018年度、全生徒が探究学習に取り組み「ニコルプロジェクト」を始めた。しかし、生徒を支援できるのは、カリキュラムを設計した一部の教師にとどまり、全校体制の取り組みにはなっていなかった。そこで22年度に、全教師が講師役となり、探究学習をテーマにした校内研修を実施し、支援ノウハウを共有。さらに多くの生徒が探究学習を高く評価していることをデータで示し、探究学習の意義を教師間に浸透させた。今では探究学習が、同校の教育活動の軸に据えられるまでになっている。

#教師のチーム・ビルディング
#大学等との外部連携

学校概要

設立 1890(明治23)年
形態 全日制/普通科/女子校
生徒数 1学年約150人
2022年度卒業生進路実績
4年制大は、國學院大、駒澤大、上智大、成蹊大、東京女子大、東洋大、日本女子大、法政大、武蔵野大、明治大、立教大、早稲田大、立命館アジア太平洋大などに延べ98人が合格。海外大合格延べ6人。

変革の背景

よりよい探究に導くための 知見の教師間での共有が課題



校長
芦澤康宏
あしざわ・やすひろ
同校に赴任して5年目。



教務部部長
池田幸代
いけだ・ゆきよ
同校に赴任して10年目。理
科。



進路指導部部長
志村穰
しむら・みゆる
同校に赴任して2年目。数
学科。



広報部部長
奥田礼章
おくだ・のりあき
同校に赴任して7年目。数
学科。



スポーツ探究担当
古渡美奈
こわたり・みな
同校に赴任して15年目。保
健体育科。



教務部探究主任
江森華子
えもり・はなこ
同校に赴任して3年目。社会
科。

2015年度、東京都・私立神田

女子園中学校高校はグローバルクラスを設置し、同クラスで探究学習をスタートさせた。18年度には全校に拡大。その後、「ニコルプロジェクト」(以下、NCL)と命名した。教務部部長の池田幸代先生は、NCLの進め方を次のように説明する。

「本校では、世界と社会に貢献する人材を育成するために、主体的に行動する力を生徒が身につけることを目的としてNCLを始めました。生徒は、自分が疑問に思うことから課題を見つけて仮説を立て、グループや個人で調査や実験などをします。『日本人と神様のつき合い方』『ロマテラピーについて』など、実に様々なテーマで探究しています」

自分の興味・関心を突き詰めて設定した課題に取り組む中で希望進路を明確にしていく生徒の姿などに、教師はNCLの手応えを感じてい

た。しかし、探究学習担当の教師が用意した指導案や教材の通りに授業を行う方法が常態化し、教師が一丸となって取り組んでいるとは言い難かった。進路指導部部長の志村穰先生は次のように語る。

「探究学習では、教師が生徒一人ひとりの学びに目を配りながら、生徒が自分で考え、気づき、探究を深められるような助言をすることが重要ですが、それがうまくできる教師は多くありませんでした。生徒の探究をよりよいものにするための知見を全校で共有する必要がありました」

変革の一手 ①

全教師が講師役となり、 探究学習に関する研修を実施

そうした課題を踏まえて22年度、職員会議や教科会、長期休業中の研修会において、探究学習をテーマとした研修を計11回、1回10分〜90分で、約11時間実施した。芦澤康宏校長は、研修の実施の背景をこう語る。

「それまで一部の教師には、『NCL

校内研修のテーマ(抜粋)

- 問いを深めるための対話とグループワーク
- 研究方法と著作権
- 中間発表と生徒間の情報シェア
- ショートディスカッション指導
- 見やすいスライドの作成指導
- 手が止まっている生徒へのアプローチ
- できる生徒へのアプローチ
- NCLと教科横断
- NCL AWARDSの最低目標ラインの共有

※学校資料を基に編集部で作成。

は探究学習の担当者が中心に行えばよい』といった受け身の姿勢が見られました。NCLが自分事となるよう、研修の講師役はあえて探究学習担当の教師ではなく、全教師に分担して務めてもらうことにしました」

研修のテーマは「手が止まっている生徒へのアプローチ」など、探究学習の指導で教師が対応に苦慮しているものとした(図1)。講師役となった教師には、探究学習に関する論文を読み込んだり、研修で行うワークを考えたりといった準備が求められた。教務部探究主任の江森華子先生は、次のように語る。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

* NCL は、Nature (自然)、Culture (文化)、Life (生命) の頭文字。社会のあらゆる課題の中からその3つにかかわるテーマを設定して、探究に取り組むこととした。

「講師役の教師の中には、グループ内の対話に参加できていない生徒を支援できなかったことなど、自分の失敗談を交えながら、指導のあり方を提案した者もいました。参加者の教師は、『私もそつだ』『そうすればよいのか』などと共感し、前向きに自身の指導改善に取り組めるようになっていきました。研修後に教師間で、探究学習の指導法について情報交換を行う様子もよく見られました」

生徒がNCLを高く評価していることも、探究学習に対する教師の意識を変えるきっかけとなった。同校は22年度から毎学期、オンラインアンケートツールで、生徒にNCLに関するアンケート調査を行っている。その質問項目の1つの「NCLの活動は将来役に立つ」の肯定率は、毎回9割前後だという(図2)。

「中学校1年次から探究学習に取り組んできた生徒が高校3年次になった21年度ごろから、生徒の教科学習に対する姿勢も、『教師から言われてやるもの』から『自ら課題を見つけてやるもの』に変わったと感じています。例えば、授業で理解できなかつた点があると、以前は『分

かりません』と言っただけでしたが、今は『ここまで理解できましたが、この部分が分からないので教えてください』などと言うようになりました。探究学習で身につけた学びの姿勢が教科学習に生きている様子を見て、多くの教師が『本腰を入れてNCLに取り組む必要がある』という意識を持つようになっていきました(池田先生)

ここも変革

生徒の学びを深化させるべく、外部連携を積極的に推進

同校は、外部リソースの活用を積極的に推進している。その1つが高大連携だ(写真)。首都圏以外にも北海道、石川県、京都府、長崎県など、全国63大学・短期大学と連携協定を締結。様々な大学と連携することで、NCLで専門性の高いテーマを設定した生徒が、そのテーマに関する分野の大学教員に直接指導を受けられるようにした。連携先の大学教員を審査員とした校内発表会も開催している。

連携先は現在も拡大中だ。芦澤校長が生徒の研究レポートなどを手に1大学ずつ訪問。連携を依頼すると、大学側は高校生とつながりを持ってもらえ、前向きに検討してもらえることが多いという。

「全国の大学には、魅力的な研究に取り組む研究者が大勢いますし、オンラインを活用すれば、地理的な制約は越えられます。また、生徒の進路意識を東京以外の大学に向けさせることも、全国の大学と連携するねらいの1つです。大学と協働して、大学訪問や講義の受講、連携先が一堂に会する進路ガイダンスの実施など、大学を詳しく知る機会も設けています」(芦澤校長)

生徒の学習習慣の定着を目的とした放課後の学習支援においても、外部リソースを活用している。東京個別指導学院と連携し、同社から派遣される大学生メンターが生徒を個別指導している。

「教師だけでは、放課後に生徒につきっきりで指導することは難しく、大学生メンターに補ってもらっています。外部連携で大切なのは、任せきりにしないことです。学年ごとに学習内容や課題は異なりますから、各学年のニーズを連携先にきちんと伝えることで、目標や課題がきちんと共有されるようになり、生徒は積極的に放課後学習に参加し、学力も向上しています」(池田先生)

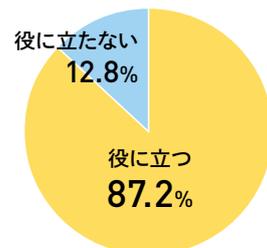


写真 連携先の亀田医療大学で、2泊3日の研修を実施。生徒は世界最先端の医療現場で模擬講義や演習を受け、現役の看護師から医療について学んだ。高大大連携によって、学びの場は毎年広がっている。

図2

NCLに対する生徒の声

Q. NCLの活動は将来役に立つと思いますか



Q. NCLの活動で何を学びましたか

- 深く突き詰めていくことを前提とした「よい問い」を生み出すことの難しさや、その問いを追求することの楽しさを学んだ。それらは社会に出て行うことだと思うので、高校生のうちに経験できてよかった。
- SNSでは似たような情報ばかりが出てくるので、「これはこうだ」と決めつけてしまいがちだった。しかし、本を読んだり、友人や先生と意見交換をしたりしたことを通じて、物事をいろいろな面から見ることの大切さに気づいた。

※学校資料を基に編集部で作成。

変革の一手②

部活動も探究学習と捉え、「スポーツ探究」を設置

23年度には、NCLの目標と育成を目指す資質・能力を教師間で共有するため、「NCL指導評価ルーブリック」を作成。各学年にNCLリーダーを配置するとともに、他の教師も何かしらの役割を担うこととし、探究学習の全校推進体制を整えた。

さらに、部活動も探究学習の一環と捉え、「スポーツ探究」も始めた。まずは全国大会で優勝経験のあるソフトボール部が、探究学習の手法を取り入れて活動している。スポーツ探究担当で、同部顧問の古渡美奈先生は次のように語る。

「自分で目標を設定し、様々な課題に取り組むプロセスは、部活動も探究学習も同じです。部活動では何事も自分で発見する姿勢が大切で、『スポーツ探究』では『本当に知りたい自分だけの発見』を求めています。生徒は毎日の発見を『部活ノート』につづり、教師とノートをやり取り

する中で得た新たな発見を学習にも生かしています。『知りたいことへの情熱』は想像を超えた活力となり、学校生活をより豊かにしています」

変革の成果と展望

教科学習と探究学習の連携のあり方をデザイン

教師が一丸となってNCLに取り組むようになったことは、教科指導にも好影響をもたらしていると、広報部部長の奥田礼章先生は語る。

「かつての本校の教師は、生徒にすぐに答えを教えがちでしたが、今は生徒が自分なりに答えを出すまで待てるようになりました。それはNCLの中で、教師が生徒の前ではなく後ろに立ち、自分で答えを見つけ出す生徒の様子を見守る経験を積んだからだと思います。『本校の生徒なら、自分で答えにたどり着こうとするはず』と、これまで以上に生徒を信頼するようになりました」

教科の授業でも、従来の講義型ではなく、教師が生徒に問いかけ、考

えさせるスタイルが増えてきているという。そうした成果を得て、次の一手としてはカリキュラム・マネジメントを強化していきたいと、志村先生は語る。

「生徒の探究学習をさらに充実させるために、各教科では何をどのよう

に指導すべきなのか、NCLと教科学習の連携のあり方をデザインしたいと考えています。例えば、英語の授業ではネイティブの教師によるライティングやスピーキングの指導を強化し、NCLでは英語での論文作成や発表を行ったたり、数学の授業で身につけた確率・統計に関する知識・技能や見方・考え方を、NCLでの調査結果の分析に活用したりするといった連携です」

同校は24年度にカリキュラムを改訂し、一部のコースではNCLの単位数を増やす予定だ。同校の探究学習は、これからも進化していく。

ベネッセが見た軌跡

生徒の活動を支える先生方のチーム力の強さ

本記事を読んでいただいた方に、「神田女学園チームの強さ」が伝わっていたらうれしく思います。先生方一人ひとりが強い挑戦心を持ち、改革の推進役の先生だけでなく、推進役を支える先生方も大変前向きで、チーム力が強い学校だと感じています。

芦澤校長は、「困難な課題に対しても生き生きと取り組む本校の教師には大変感謝している」と話され、その際に周りにいらっしゃった先生方は、「芦澤校長は何事も現場に任せてくださるし、意見もたくさん聞いてくださる」と言われていました。そのような先生方の明るく和やかな雰囲気は、きっと生徒たちに伝わるのでしょう。学校に訪問させていただく度に垣間見える彼女たちの横顔はととても明るく、伸び伸びとそれぞれの活動に打ち込んでいる様子が見えがえます。

活気にあふれる学校づくりを引き続きご支援していけるよう、私も精進して参ります。

(株)ベネッセコーポレーション 東京支社
神田女学園中学校高校担当 竹下友梨



お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任